

教 え ない 授 業 へ の ト ラ イ

香 川 修 見

大阪学院大学情報学部

〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

電話:06-6381-8434 (代表) FAX:06-6382-4363

E-mail: kagawa@db.soc.i.kyoto-u.ac.jp

1. はじめに

学校で与えられるほとんどの課題には正解が用意されている。学生は正解や正解に到達する方法を教えられ課題に取り組む。しかし、社会で遭遇するほとんどの問題には正解が用意されていない。問題の所在を見付け、調査や議論をして対策を立て、実行して解決に至る。

学生が問題を見付け解決策を考えるスタイルの教育が必要なのは多くの教師が気付いている。海外では特にインターネット普及を契機に、このスタイルへの取組みが盛んである。しかし、我国では筆者の知る限り、卒業研究などのゼミナール以外で本格的に授業で実施している例は少ない。

筆者は大阪学院大学で、情報系と非情報系の学科の学生を対象にコンピュータ演習（選択）を担当している。この科目では、学生は興味のあるテーマを自ら設定し、自分のペースで取り組む。教師からの知識伝達は可能な限り少なくする。即ち「教えない授業」である。学生は自らWebやPowerPointなどのコンピュータツールの使い方を学び、それらを使って調査・発表・報告書提出をし、教師は助言と評価を与えている。

途中経過であるが次の成果を得ている。

- (1) 一方的な伝達型の講義に比べ知識や技術の量と定着度が大きく、達成感も大きい。
- (2) 脱落する学生も多く学習の格差が大きい。
- (3) 学生・教師ともに負担が大きい。半年（3時間/週）では足りない。
- (4) コンピュータツールのオンラインマニュアルやサポート要員が重要な役割を果たす。

本稿では非情報系学科での「教えない授業」の手法と途中経過について述べる。

2. 目 標

目標にしている項目は次のとおりである。

- (1) 意味がある問題点を抽出でき、アプローチの方向性を見出せる。
- (2) Web検索、図書館、実地調査を通じ必要情報を収集できる。情報の価値も評価できる。
- (3) 調査結果を文書（報告書）にまとめられる。
- (4) 単独でプレゼンテーションができる。
- (5) 他の発表に建設的意見が出せ討論ができる。
- (6) グループ内で役割分担し協調作業ができる。
- (7) パソコンやインターネットのアプリケーションが扱え、その役割と効果を体感できる。

3. 授 業

インターネット接続のパソコン教室で実施する。MIT開発のWebアプリケーション(Caddie)を使い、教材提示や発表・ディスカッション・レポー

ト提出などに対する評価を伝える。授業時間外ではe-mailや電話を利用する。3時間/週、半年（1期）で終る。次の3段階で進める。

- (1) 授業方法、利用できるパソコンとアプリケーションソフトおよびオンラインマニュアルの所在を説明する。アプリケーションソフトは起動方法だけを教える。
- (2) 事前レッスンとして、与えられた雑誌の記事を報告書にまとめ発表する課題を与える。不明な点や曖昧な点の調査も含む。
- (3) 学生は独自にテーマを設定し、調査・発表・討論し報告書を作成する。中間でも途中経過を発表する。発表を聞く学生には質問を義務づける。教師は質問すると共に方向性・優れた点・改善点などの助言を与える。質問のいくつかはその学生の次の課題となる。

4. 成 果

目標の(1)は達成できず（教師支援で実施）、(2)～(4)はほぼ達成、(5)は不十分、(6)は失敗、(7)はほぼ達成と言える。期末の感想文などを含め、成果を次にまとめる。

- (1) 当初、自分では不可能と思っていた学生が完成できるなど、文書やOHPを作成し発表した自信が大きい。ゴールした学生のほとんどが「もっとやりたい」と言う感想を持つ。
- (2) 教師が中間報告書に朱書きコメントを入れる、良い点を称賛する、意義の説明をするなど、評価を明確にするほど効果が大きい。
- (3) Web検索では、製品PR系の情報が多く基礎理論系はほとんど無いなど、Webにある情報が偏在していることを発見する学生が多い。
- (4) ゴールする学生は40%程度。時間外で課題をやる意欲が無い学生が脱落する。脱落者の授業への印象は悪く、評価の格差が大きい。
- (5) 討論が貧弱である。課さない質問をしない。質問を非難・攻撃と取る傾向がある。
- (6) 多人数のクラスは評価する教師の負担が大きくなり時間も不足である。教授学習支援システムの開発が必要である。
- (7) 時間外の教室利用、サポート要員、オンラインマニュアルの効果が大きい。

5. おわりに

必ずしも成功しつつあるとは言えないが、「教えない授業」は伝達型のそれとは異質の効果をもたらすことは事実である。様々なインターネットアプリケーションを利用し学習環境を整備するとともに、体系的な授業戦略と技法を蓄積すべきである。本スタイルで学んだことや自信は、在学中というより、社会に出てからの効果が大きいと考えられる。